

上高地における環境教育

エコガイド団体の取り組みと参加者の意識
中嶋ゼミ 04L1055J 並木美紀江

問題・目的

近年、自然や環境を深く知ることをテーマとして旅行が増えてきた。人々の身近で自然に触れる機会が減少したと言われており、自然体験への欲求は増大している(池谷 2007)。自然ガイドツアーにおける解説とは、事実を言葉で伝えることだけではなく、結果として、有意義な体験が参加者の自然に対する興味や理解を増加させることを目的としている。ガイドに対する旅行者のニーズも多様化しており、ガイド団体に関する事例的研究、調査報告が散見できる。また、ガイドの専門性、ホスピタリティを持ったエコガイドが注目されており日本各地のガイド団体の取り組みも活発化している。

長野県の代表的な観光地である上高地でも、旅行者のニーズに伴い、6年前より3つの民間団体がエコガイドを設立している。その他、公的団体として13年前より自然公園財団が運営するガイドが存在する。本研究の目的は、今までの既往研究で述べられてきた課題や重要な要素とされている事項について、上高地のガイド団体を調査対象とし、事例研究を通して実態を検証することである。加えて事業形態を重要な要因と考え、公民の事業形態の相違にも焦点をあてる。本研究では、先行研究を踏まえ以下のような課題を問題意識として取り組んでいく。1. 旅行者への情報の不足、情報発信に課題がある。2. 民間と公的な団体が混在する地域において連携が薄い。3. よりエンターテイメント性が必要とされるようになった。その他、ガイドの知識力、プログラム企画力は緊急性の高い課題であることが指摘されている(南・小口・寺崎 2002)。また、参加者側の評価という視点を入れることにより客観的に考察を進めていく。東京都でもエコガイドの先進地とも言える小笠原地域で、16年度にガイド参加者へのアンケートを実施している。上高地のガイドを事例として、同様の調査を行い、参加者の期待・満足度を明らかにする。その上で、提供側での運営方針、課題が参加者の評価にどのように影響しているのか検討する。

方法

1) 公的機関、民間機関を調査対象としてエコガイド団体の活動の現状や、既存研究で指摘されている課題や重要とされる事項についての実態を把握するためのインタビュー調査を行う。2) ガイドへの期待、ガイドの満足度を問う質問紙を作成し、ガイド参加

者の意識を調査する。質問紙調査の項目は東京都が2006年に小笠原で実施したガイドに関するアンケートを基に、参加者の期待・満足度を問う質問項目を作成した。

結果と考察

エコガイド提供側では、ガイド内容やガイドの能力向上に向けた動きにおいて、公的団体(自然公園財団)より民間の団体(NPG)の方が比較的、自由度の高い活動がなされているということが分かった。自然公園財団では、業務に対する人手不足、職員の大半が半期雇用であるという現状からガイドの改善に費やす時間がないのが現状のようである。解決策として、パークボランティアの活性化が望まれる。しかし、ボランティアの運営課題として、若いボランティアの不足による活動範囲の縮小、実際に活動するメンバーの減少、固定化、活動のマンネリ化などが築島(2000)によって指摘されており、上高地のボランティアにおいても同様の課題が見られた。ボランティアの活性化のためには人員を補うという関係だけではなく、ボランティアの自立した活動を支援するパートナーシップを築いていくことが求められている。また、ガイドの網羅的な情報発信や、地域全体における資質向上のために、ガイド間での連携が必要となってきた。

参加者側の意識については、ガイド参加前の期待、満足度ともに環境教育的な要素よりもエンターテイメント性やホスピタリティといったことが重要視されることが明らかになった。これは、提供側のNPGが意図するガイド内容と参加者のニーズが一致しているといえる。しかし、参加者の層や自然に対する興味の度合いによっても期待や満足度に違いがでてくることが予想される。今後、満足度の高いエコガイドを提供していくためにも継続して参加者のニーズを把握していくことが望まれる。

引用文献

池谷りさ 2007 日本のエコツーリズムの現状と課題 立命館平和研究 8,49-55/一木重夫 海津ゆりえ 2006 小笠原諸島におけるエコツアーの満足度の評価に関する研究 小笠原研究年報 29,37-51/南正人 小口幸子 寺崎竜雄 2002 実践講座インタープリテーション 12-49/東京都産業労働局 2005 東京都自然ガイドに係るモニター調査結果報告書/築島明 2000 各地のパークボランティア活動の報告を振り返って 国立公園,584,18-21